



南極

第18号

平成16年1月15日
南極倶楽部会報

アデリーペンギンの小説と詩

星合孝男

2003年秋に出発した45次観測隊の隊長は、わが南極倶楽部の機関紙「南極」の編集長、神田啓史さんである。出発前の11月11日、神田さんと行を共にし、現在越冬中の生物観測担当、伊村 智、工藤 栄、坂本健太郎の4方の壮行会が開かれた。越冬の3人は、スカルプスネスにある湖水の底に生えるコケの研究をする。コケの話は素人の私には無理だから、いずれ神田さんが、この3人のうちの誰かに書いてもらうことにして、例によってここでは昔話をさせていただく。しかし、昔話をしようと考えた切っ掛けは、もちろんこの11月11日の壮行会であった。

たまたま向いの席に座った、若いペンギン研究者、高橋晃周さんが言い出した「最近青柳さんの本を読んだんですが、その中に先生が青柳さんに贈った言葉が出ていました。」と。青柳さんとは1971 - 72年、13次夏隊員として参加した、東京教育大学附属盲学校教諭だった、青柳昌宏さんのことである。この時青柳さんは、オングルカル

ベンなどの昭和基地附近やプリンスオラフの日の出岬のルッカリーで、アデリーペンギンの生態調査を行なった。4次隊の芳賀良一、松田達郎、吉田栄夫の各氏が、アデリーに附けた金属バンドが発見され、話題になった。こんなエピソードをも含めて「ふじ」船上、南極大陸露岩での体験は、1974年紀元社から出版された「ペンギンの国訪問記」に、平易に楽しげに語られている。当時の夏隊の生活が良くわかる。

1978年、青柳さんは共同研究者の田宮康臣さんと2人、ロス島の北端、バード岬にあるニュージーランドの生物観測小屋で、アデリーペンギンの生態研究を行なうことになった。青柳さんの13次での観測成果と、ペンギン研究に対する情熱が、日本極地研究振興会理事の鳥居鉄也さんを動かした。鳥居さんはかねて親交のあった、ニュージーランド南極局のB.トムソン局長と交渉、この調査を実現させたと聞いた。

1978年の10月のある夕方、青柳さんらの壮行会が開かれた。先に高橋さんが「青柳さんの本にあった。」といっ

た言葉を私が口にしたのは、この席であった。そして青柳さんの本とは、1981年平凡社から上梓された「ペンギン - 南極からの手紙」である。これは青柳さんがバード岬で行なった観測の記録を、手紙風にしたもので、私の発言はこの書物に、こんな形で紹介されていた。

- 出発直前、国立極地研究所の星合先生とお話していた時、イギリス隊の膨大な研究報告の話になり、「とても、ああいう形のもの、私にはできそうもありません。」という、先生が「青柳さん、彼らのが小説だったら、私たちは詩を書きましょう。」と励まして下さったのを思い出しています。

南極バード岬で私も日本の短い詩、俳句を一句作ることができたのでしょうか。 -

たしかに青柳さん達がここで確認したのは、アデリーペンギンの親子の声による交信（或いは会話）についてであり、まさにキラッと輝く観察の結果であった。

青柳さんから「ペンギン - 南極からの手紙」を頂戴し目を通した私は、この件りに出会って思わず「あっ、違う。」と思った。たしかに青柳さん達の壮行会で、私は似たような発言をした。しかしこの時私は「時間にも行動範囲にも限りがあるから、青柳さん、浩瀚な叙事詩を書くことはできないかもしれ

ませんが、感性を研ぎ澄まして自然を見れば、どこにいても何時でも抒情詩を作ることはできるはずですよ。期待しています。」といったつもりであった。言うまでもなく、小説と詩とは異なるジャンルに属する。したがって、この両者を比べることはできまい。比べるとすれば「詩」という同一ジャンルの中の叙事詩と抒情詩との間であるべきと、その時は考えての発言であった。

「ペンギン - 南極からの手紙」を読んで以来、ずっと私はこのことにこだわっていた。だが青柳さんに正面切って話すことでもないと、こだわりつつもそのままにしていた。ところが、私より4才も若い青柳さんが、1998年の10月18日に、突然脳こうそくのために亡くなられてしまった。私は永遠に、青柳さんの記憶と私の発言との差について説明する機会を失くしてしまったのであった。こんなこだわりがあったから、高橋さんから「青柳さんの本の中の先生の言葉と言われた瞬間、「ペンギン - 南極からの手紙」と1978年10月の壮行会の情景を思い出したのであった。

そして今は、小説と詩にはこだわらなくても良いと思っている。若い人が青柳さんの文章から、自然を見る時には、その中にある詩を見出すことの大事さを理解してくれた、ということがわかったからである。言葉は違って

でも、私の言わんとしたことを、青柳さんが青柳さんなりの表現で書いて下さり、若い人がその真髄を感得してくれたのだからである。

45 次の壮行会は、計らずも、三十年来の私の心の中のわだかまりを解きほぐしてくれ、ペンギンの調査・研究をなさるとともに、自然保護を目指してペンギン基金を立ち上げた青柳さんの、大きくて暖かなお人柄を思い出させてくれた。青柳さんのご冥福を祈るや切である。(7 次夏・海洋生物、8 次冬・11 次冬・生物、16 次冬・23 次冬・28 次夏、隊長)

消える第二極年生れの観測所

村越 望

国際地球観測年 (IGY) に先立つ 25 年前、つまり 1932 年に第二極年が始まり日本も参加した。富士山測候所や樺太豊原の地磁気観測所はその時を契機として生まれた。敗戦とともに豊原の地磁気観測所は消えたけれど、富士山測候所はそのまま活動を続け今にいたっている。

すぐそこに見えているのに、海拔 3,776 メートルの山頂で通年観測を維持するのは容易ではない。強風や突風、凍った急斜面、低温、低圧などの自然条件の厳しさによって、すでに 4 人の犠牲者が出ている。戦争中サイパンか

ら飛んでくる B-29 にとって富士山は絶好のランドマーク、霊峰富士はあって迷惑、無いほうが良い存在になってしまった。帝都防衛の最前線、八丈島と直接超短波連絡が出来ることから大本営はこの頂上に通信所をつくり、八丈島上空を通過する B-29 の詳細を逸早く東京に知らせることにした。電力供給のために頂上まで地下ケーブルがひかれることになった。兵士を使う人海戦術が当時としての大工事を可能とした。御殿場の滝が原演習場に駐屯していた 500 人の歩兵部隊が毎日、300 メートルのケーブルを二つ折りにして 3 メートル間隔で兵士が取付き肩に担ぎ山頂を目指した。まるで百足の親分みたいな恰好で太郎坊の北西標高約 1,600 メートル、架空線の末端から山頂を目指した。腰に弁当を吊るし初めのうちこそ遠足気分の山行きだったが、高度が高くなるにつれて一日では行き着かない日も出てきたが、この突貫工事は二週間で終わった。1944 年秋のことであった。

山頂の一角に取付いた電力線が観測所まで達するのはずっと遅れ戦後の 1947 年のことであった。八丈島との交信がどれほど役にたったかは知らないが、なぜか観測所は艦載機の執拗な機銃攻撃にあい斥舎は 100 発以上被弾した。1960 年代になって B-29 ならぬ南方洋上から本土を伺う台風監視の最前

線としてレーダーが設置され、高さの利を存分に発揮して 800 キロメートル先の台風を見付け天気予報におおいに貢献した。その後、人工衛星ひまわりの活躍で、全地球表面のほぼ三分の一を覆う地域の雲の映像の利用が可能になり、富士山レーダーの役目は終わった。また、地上観測についても、近時、遠隔観測の技術の発達により無人観測に切り替えられつつあり、富士山観測所も例外ではなく、2004 年に無人化されるようである。第二極年以来、70 余年えいえいとして続いた富士山観測所は有人の観測所としての使命を終えようとしている。一方、25 年遅く生まれた IGY 昭和基地観測所はまだまだ続いて欲しいとせつに願っている。(1 次冬・4 次冬・気象、9 次夏・設営一般、10 次夏・12 次夏・15 次冬・副隊長)

南極の思い出

(極点旅行の通信を担当して)

西部暢一

極点旅行隊の編成は当初、大型雪上車 4 台と 15 台の橇から成っていた。1 番車の KD-604 には村山隊長、藤原、土屋、西部の 4 名が乗り、先導・高度測定・地形調査・気象観測・通信を担当した。2 番車は同 603 で川崎と山本、高度測定・雪尺(積雪)の担当、3 番車は同 605 で柿沼、江頭、矢内、細谷

で地磁気・重力・ULF・雪面・雪氷・天測、4 号車 606 には遠藤、小林で地震観測と雪氷を担当した。

昭和基地を出て約 1 ヶ月の間は毎日地吹雪、気温はマイナス 50 度の寒さでこの間に、雪氷担当の遠藤がアイスドリルに巻き込まれて左腕骨折の負傷をしたり、大型鉄橇 3 台に亀裂が生じて放棄したりして苦しいスタートであった。75 度からプラトー基地に至る区間では好天に恵まれたものの約 3,800 米の高度を南緯 77 度付近で記録した。またその頃マイナス 60 度の気温も経験、603 号車が走行不能となって放棄、車と橇が雪面深く沈む軟雪に悩みながら 49 日目にプラトー基地に到着した。プラトー基地から極点間、及び帰路は気温が上り好天も続いた。雪面も良好で順調な南進の末、83 日目に極点に到着、帰途はすべて順調で何も問題もなかった。

141 日目に昭和基地に帰投、5,182 km の極点往復ができたのである。ここにマイナス 60 度に耐えた低温性能、4,000 メートルの高度に耐えた走行性能、5,000 キロに及ぶ走行に耐えた耐久性能、観測、航法、通信の各機器を搭載し、5 ヶ月の生活を快適に過ごせた居住性能を持つ国産雪上車の優秀なことを特に記したい。

(その 1) 極点旅行中に経験した話

3 億円強奪事件、東京府中で 3 億円

が強奪されたが、その大要がモールズで共同通信社から放送されたのだが、受信は走行中の雪上車であり、振動と空中状態の変化で、自信の持てる内容ではなかった。夕食時に全員が集ったところで発表するならわしだったが、たまたま小林ドクターが府中の出身だったため、府中に3億円も盗られるような金持ちは絶対にいないヨ!!と云うひとことで盛り上がらなかった。ただし翌日の昭和基地との定時連絡で再確認し3億円は正しかったことになった。

(その2)

文部大臣(坂田道太)が極点旅行隊の位置を大臣室に掲げた南極の地図上に毎日プロットしているので通信は絶対途絶しないようにと、南極事務室から特に要請があった。

往路プラトール基地到着前にメインで使用していたKWM2という優秀な無線機が故障して修理のため隊長にお願いして一日だけ南進をしない日を設けていただいたが、その甲斐あってその日のうちに故障は復旧し、内心ホットしたものである。昭和基地との通信は毎日正午に行なっていたが132日中、不通は13日(空中状態不良11日、送信機故障2日)であった。

(その3) 徒然草

帰途、間もなく昭和基地という地点まで来たある日、とても受信しにくい電報を着信した。普通文の電報は、大

抵は読みながら、この次に来るであろう文字を予想しながら受信するのが常であるが、全く予想ができずひどく苦労したのである。やっと受信した電文を私は声を出して、たどたどしく読み始めたのである。すると一緒にいた小林ドクターが、私が読まんとする先へ先へ声を出すではないか。これには驚いた。ドクター曰く、これは徒然草の一節で高名の木登りだよ。この時医者 of 学問は、大したもんだナ。と感心と尊敬で自分がとても小さく感じたのである。

(その4)

603でその当時寝起きしていたのが、小林、川崎だったと思う。603が走行不能になると二人は家なき子となって、604と605に引取られて、毎日一番遅く寝て、一番早く起きる羽目になったのである。下の左右のベッドの間に鉄のバーを二本渡し、その上にベニヤ板を渡して簡易ベッドにしたのである。

マイナス40~50度の頃、夜中に小用を足す者が必ずいるのでこの二人はその度に腕や足を踏まれたに違いないが、二人の不平は聞いたことはなかった。

(その5)

雪上車4台の車間連絡用にトランシーバーを用意したが、内地のテスト時は好調で、いざ本番になった時使い物にならなくなった。

隊長はダンボールの切れ端に太いまジックで後続車に伝言事項を書いて雪の上に置くことにした。隊長はこの方法は確実と思ったのか、電信よりも郵便でという言葉が流行らせたのである。トランシーバーは耐寒処理がしてない代物で、トランジスタが全部不良になったらしい。私も本気にならず郵便を利用したものである。

(その6)

隊長は根っからのNAVYだ。604は瑞鶴、605は翔鶴、606は飛龍、603は蒼龍、と命名し出発した。いずれも太平洋戦争当時、レイテ沖海戦で名をはせた連合艦隊の航空母艦である。従って大雪原を南進する極点旅行隊は、あたかも大海原を堂々と進むかつての連合艦隊に見えたのかも知れない。604には小さな日章旗が掲げられていた。極点に到着した際も間髪を入れず大きな日章旗を掲揚したものである。NAVYは何処から何処までもスマートである。(5次冬・7次夏・9次冬、通信)

“南極後遺症”

田口章利

ヨーロッパ大陸から魔女の鼻のように突き出したスカンジナビア半島は、約1万年前まで厚い氷床に覆われていた。その半島の内側、ホルムズ湾の奥

深く、半島の付け根の辺りは、氷河が後退してのち約250年も隆起し、今でも毎年9ミリのずつ持ち上がっているのだという。

第29次南極観測隊への同行取材から16年。このところ毎年、夏休みになると海外へ出かけているが、その行く所のほとんどが氷河地形であり、要は“南極後遺症”と言えるほど「氷河地形が好きだ」ということに、このごろようやく気が付いた。長い間、日曜の休みさえ取れないヤクザな暮らしを続けて来たが、5年前から事務職に代わり、週休2日どころか夏・冬の休みまで取れるようになると、急に旅の虫がうずき出し、これまで自分に禁じていた海外ツアーへ得たりや応と出ることになっている。

何、安いツアーを探して安直なパッケージ旅行を楽しむだけだが、初年度の1998年にはカナダ・ロッキー山脈とナイアガラ瀑布、2年目はイタリア9日間の旅、3年目は英国周遊で、4年目はスイス・アルプスからイタリア・ドロミテ山塊へ、そして5年目の今年は北欧4か国周遊と、遊び呆けている。カナディアン・ロッキーは言うまでもなく氷河地形そのもので、雄大で美しい自然に見惚れたが、スコットランドもハイランド地方は氷河谷の荒れた地形に湖沼が点在し、古都エディンバラの城山も後退する氷河が削り損

ねた岩塊だという。アルプスでは雪渓の上を歩き、1956年の冬季五輪の舞台となったコルティナ・ダンペッツォを囲むドロミテの山々は、平たく言えば太古の昔に海底に堆積したストロマトライトがドロマイト（ CaMgO = 炭酸塩岩）と化し、造山運動で隆起した揚げ句、風化した姿だという。ピンク色をしたドロマイトが、風雨の浸食を受けて海へと流れ出た先が、あの奇跡の海上都市・ヴェネツィアを浮かべるラグーナ（潟）であり、変成作用を受けて大理石となれば、聖フランチェスコ教会など繊細な陰影に彩られたアッシジの街並みを作っていると言えば、「へえ」を連発する人も多いただろう。

この夏訪れた北欧は、氷河が残した「溺れ谷」のバルト海や、湾口から200^キもの奥地にまで入り込んだフィヨルドなど、見るものすべてが“氷河の置き土産”だった。両の眼を閉じれば、今でもまぶたの裏に清冽な雪解け水が奔流となって氷河湖に流れ込むノルウェーの田園風景が浮かんで来る。さて、この次はどこへ行こうか。（29次夏・報道）

南極便り

「家族に感謝！」

福谷 博

「南極に行って一年半も日本を離れ

る」ということは、取りも直さずこの間日本に残っている者の負担が増えるということだ。それは、親であり、配偶者であり、子であり、パートナーであり、職場であり、極研であり諸々の方々に降りかかることである。

第9次で参加した時は、婚約して出かけた。両親も弟妹もそれなりに元気で、親族一同もまた元気な顔を見せて送り出してくれた。当の本人である私は、文字どおり後顧の憂い無くルンルン気分が出かけたものだ。南極での仕事の成就と婚約者の不二子さんのことを考えていれば良かったわけである（ちなみに第九次隊では不二子さんは私より有名）。

南極で観測する者は、自分のやりたいことをやろうと南極くんだりまで好きでやってきているわけだから、特に苦勞を感じることは無い。苦勞を感じたとしてもそれは主として仕事上のことだから、買ってもしたいくらいであろう。人間関係にしても30ないし40人の社会であり、もともと目的意識をもった集団である。良きご両親から良き躰も受け、教養も見識も確かな集団であるから喧嘩をしてもたかが知れている。

しかし残された者はそうは行かない。家族、親族、隣近所、地域社会と果てしなく広がる人間関係を相手に、日夜、好むと好まざるとに関わらず煩わしさ

の中にある。そして、いちいち対処してゆかなければならない。

母が私の越冬中に癌を発病した。出発した翌年の 6 月頃だという。しかし、私には知らされなかった。後から聞いたところによれば、父の配慮との事だった。この頃から、不二子さんの電報も滞りがちになった。

母の癌は確実に進行し、翌年の 1 月末に亡くなった。この間、父も弟妹も不二子さんも、家族会も職場、極研の方々も大変な思いをしていたことは想像に難くない。

私は 2 月末、ケープタウンに向かう「ふじ」の中でその知らせを聞いた。何も出来なかったことを悔やむと同時に、皆が辛苦に耐えいろいろと配慮してくれたことに感謝した。家族や私に繋がる人々に感謝した。今も感謝している。感謝し続けよう。(9 次・13 次冬・気象)

編集後記

あけましておめでとうございます。「南極」第 18 号をお届けいたします。編集担当は今、南極支局に出張中です。元旦の日、オングル海峡が開き、みるみる海水面が広がりました。漣の立つ海水面に冰山が行ったり来たり景色をながめながらの一筆です。一日の平均気温はプラスで進んでおり、実に温

かな南極です。オーストラリアからの暴風圏もとくに大きな揺れもなく、昭和基地までのチャージングはゼロ。すいすいと泳ぐように昭和基地に接岸。かろうじて、昭和基地の北の浦に残された氷厚 150 cm ほどの多年氷に、頭を突っ込んでの氷上輸送。潮流の影響で船は後ずさりし、また、前に進む、これを繰り返しているうちに、見晴らし岩の一番近いところから 200 m、水深 30 m を切るほどに接近。原口艦長、船底をこするか、岸壁につけるかの必死のチャレンジで氷上輸送を予定以上達成。気が付けば、船の後部は大海原。そそくさとその場を逃げ出し、今度はとっつきルート沿いに残っている氷厚 100 cm 程度の多年氷にまたまた突っ込み、本格輸送を開始。この氷もいつまで残っているのやら。天候が幸いして、基地の観測、作業も順調です。NHK、朝日新聞と日本での南極はホットニュースで満載の様子ですが、ここ南極は本当にホット(温かい)なのです。

皆さん、次号の原稿締め切りは 3 月 29 日です。南極倶楽部会報「南極」の南極支局からも、よろしくお願ひします。神田啓史 国立極地研究所
〒173-8515 東京都板橋区加賀 1-9-10
Tel 03-3962-4761, Fax 03-3962-1525
(e-mail での投稿は、次号に限り次のアドレスへお願ひいたします。
yachiyok@nipr.ac.jp)